千紅萬紫

全

罵山人

只詩館

千紅萬紫初集

六十二ヶ年ぶりにて
そなたもまた
こうもぶみ人名六十二年と
甲辰軍と謂ひ
甲辰軍経井八百人名六十
二年の所といひ
こうもぶいでまた

花さか爺の絵に

むかしはいかなる灰をまきて
かれ木にみえずして花をさかせけん

示禅僧

逢仏殺仏逢祖殺祖逢布子殺布
子逢好女殺好女見八箇月昨日解
脱

是年より雪なくしてふりけるに
さぞこそしらふうらむ雪をあふぎて

あきまで花とさくらなよしもがな
毎年のごとく深川にゆきて
宝ずまの光が浄しかし千金に
とゝこの図をまろ一時

題云坊新画
言可観也中庸不可解也

鮭の画に

縁うみ海よりいでゝむさしの
そらはいるゝよ三千かその魚

居らぬ翁粉餅図

わたりゐて升粟の末にいらぬまゆの
かみきよしきりしめやまさきつぞて

題土屋清三壁

地ハ近若宮升給源居ハ號土屋土生金
年中正直之延命家内安全火用心

竹に雀の画に

とまるべき雀ならやむかしめでたん
夕ぐれしけりふしどなめく

韓信股をくゞる画に

からいかいからりかいりから唐紙屋のこ
と称してみたんの刀とりまくあるす
あつりね

道あうにいふ市人またそて
まくらぶらぬ中まどふね

鬼念仏画賛

悟らは九ほのうしろに迷へは二本の
角念珠しるしくゞりしれ鬼

見しらぬかくて今さらそかへれ
雖下欲二行一レ市二雪後道悪一半途而帰
也

誘レ子行レ市泥残雪深引返半途心
乗レ興来レ舊不レ乗レ興何必投レ糸歓世音

本石町嘉田氏にて芸みせにありにかみ
なかくきて人のあり〳〵さて
百余里を三十里斗引かへし
道すがらのまり入する

書画帖序

ほとほり出るを詩歌といひ筆より出しを
画といふとあれども詩歌にあらず
詩歌ならずはぐくみあり唐一代を
四つ別にして初盛中晩の詩を唐とはいひ
しは宋唐にして儒唐といのちブウく
とはなれして今の詩翁謀論のそのうし
居とはなく世上に知のものをありて馬琴緑
あしからぬその心得ありのかへ一草庵

集に新発意とかごりし底のあざりつきなく
おもふくにおくれ侍まし底本の中にか此翁
底といふもくちおもしろき事ありとぞかきしき
この本は師伝なく秘説なし和翁によて
出く和翁よりおかしく笑ひり出し書籤
その墓よりにちびろくて性いちんあり籤寺
乃免の空とうくぞうこ二百五十の閑庵が
すさからとやくるそんありまいしぐ今光の
ふくそふれ口にこうらで筆をとるをみうたり

自讃くさいくさいその身をこしびとびするに
とびもいりおさく

女達磨みるに影を

庭前柏葉 齋宮が紋 面壁九年ノ月 子列
私ニ同シ 色ト香ト 乗メ雲ニ去ル むすぶ妙
北馬子の外一人としわに己れの調
桜子誠のてりしる子一人ハ小戸をくりふさ
みつ巴調じつとめえへてき下戸まて
まら巴おて ゆゑらしくしみ郎

竹と雀の画を

雀どもの物ごいどもとれしらぬが
ちらちらとみやりたるさまのおもしろ

唐詩のこゝろをよめるうた

高館に燈張りてば風清く
秋深き月雁帰る年

不知心誰にうつむき朝顔を
ぬらすこゝろのうらぶれる露

花

蚕をとる為とうりとくに花まつる
こゝろを造化の功造化

月雪花

花いさゝかに月いろ多くとのこゝろ
ものうけるあるじが図のさまものいと
まれで花いろまさるこゝろ七十五月いろ
秋中の新月はの月もまたぬ
雪い豐とし年の貢物いでつゝ
ちらちらとふるこゝろ明石弥陀仏の

[illegible]

三番叟

[illegible]

案山子の画

[illegible]

山門五三桐と云る狂言の名題

山門[illegible]美[illegible]当様[illegible]代

五三の桐の金[illegible]

葉[illegible]

[illegible]三の[illegible]山[illegible]

猿牽の画

[illegible]代在裏[illegible]猿在肩[illegible]煩悩大追

[illegible]四生烟一升米[illegible]起波

百文、縞

[illegible]の百一升の米[illegible]

[illegible]に四軒[illegible]と軒

北馬の[illegible]仕[illegible]二人[illegible]

[illegible]

北馬の絵北[illegible]

[illegible]

金[illegible]

轉[illegible]の[illegible]

大般若六百[illegible]

金[illegible]百貫

日光山[illegible]

[illegible]

松ごし[illegible]

[illegible]

七[illegible]、鈔

[illegible]、夕顔[illegible]條、霧

蕉翁、[illegible]飯四山、烟

猿のすがたに三猿あり一つの白猿
ひとりとぐらあるものもあるもの
猿の耳と目をとざしたるいんぐる
さるぐるいぐるみんなもしかして
面白しこうもうこうぐるまきこぐるま
こうこうと花といこうぐるみ智恵
御山の鹿の画
こうぐこうこうも馬とんこうこうこうこうこうこう御山ぐ
羊の毛こうくこうけるふ男鹿

郭公は章とあるさあきふ忘
こうこう峯よあいうこうこうこう人の
いつよ
こうこう峯より山ほとぎすこうこうこう千年
あるこうこうあるこうこうかるこう玉章
住吉白梨画
書苔帯衣掛岩扇白雪似雪思
山ノ臘ヲ
苔衣こうこうかいこうこうこうこう

きめ〳〵山乃字をとるなり郡
楽天う詩白傅の称あり〳〵るかな
平仄のあき詩いつゝ〳〵詩詠い詩の
上手下手よりとい〳〵る波多のなごり
かく〳〵あきらかいよ〳〵むすめ廟堂不説
既往不咎といへど〳〵もうるる謡つる
ものゝ心地あり〳〵
むぶはとゝらく〳〵天がこゝのゝ
久〳〵こゝわぐゝ〳〵ゝ杉

淺草蓮華王寺蜂房乃
画今あり
さゝゝゆゝくゝゝゝいみつ蜂ゝゝ巳
むゝぐゝゝあゝゝ蜂房乃今
かいこ菴よ海のゝく
山ゝゝゆゝいゝ山ゝゝぶゝゝんこ菴
えひての夢い蜂ゝゝゝれ
ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
蛇のゝゝゝゝ

さて〳〵すさまじきあめにて候
つゆいり候
からかさは江戸のすゝうりもとめ候へば
そこら町のそうらうすみやは
櫂師のひよりこそうるよ
搆りびよきかさのあさき海ひと
ゆくや他船とふきあり舟
五月雨
おりくに時おもしくてかへりまいると

こゝばかりまゐらせ候かしく　五月雨
旨趣の祝
福の神ちかよりまさんとて候紙
ゑびすうけみ年は来るよしと
同神にふすびちかつきの
うけよりる神さまもしもせ何事も
ころもつゝしむ御ふたふみ
為田氏名をとりよすまする大井
川流とまへく

[illegible]田うゑ通[illegible]秋の[illegible]
俊[illegible]々[illegible]
[illegible]
和[illegible]柑子浮[illegible]世金牛 重白根
[illegible]先合此物求上
布袋[illegible]
[illegible]
[illegible]六 値七[illegible]
[illegible]

[illegible]悪[illegible]仏[illegible]一[illegible]
[illegible]法華経[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]といへる花あるべ
少世小町といふて美人あるよ

鯉の画よ

[illegible]いろみの彩をかぐべき事
[illegible]牛の角文字

嵯峨嵐山遊覧図屏風
のうち

西国よりふる一日みぶ[illegible]
[illegible]ぐよ花[illegible]

[illegible]作の画に
[illegible]いてもつ[illegible]
八月さあがくく九年面壁

粉蓮とうつる画よ

清玉山[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

川辺より舟にて大川へ
出る此はの両に水にて
和らぎ花火
ものを
花火
埋ニ之猫児
呼ビ呼ブ牛
東西可憐之
牛蛙菩提

伯夷
焼亡廣
水の
ゆくすゑ
形場
江戸

山とみるよ所の金星あり淡灯滅
ちりぬ
所ちぐのうちくて山とは山王月
千年まつのぼる
盃をぐに能ふ
盃をぐにかくて月をふ
まちとしてしてして出ぬ
郭をよ有の明の月
うちふ過ぬ

ほうとうに吟ふ
はる位 ナ寺 月まあけの顔
世に和ぬ
しらいわたるあり
姫のいのちぐにてふれぐ行ぐ
しの連ぐ
あ〳〵ぐ出ゆをぐて天の川
波しらぐ早にうしへき詠
ぬくてるこのこと

ことのくさ／＼はしとなく
料おほかしこまるさい冷索麪にからし
まく刺鯖に蓴なまぐさくてしと媽婦が
虎の鬚とるなど久しいものぞ七夕
七首
あまづきあめのくもにちよ字と上ま
とさして
うれしとさしゆうん珠宝刀
まことうしかしいしほしまいもけぞ

みづのもなかの星みかへしにやあふくらい
まらししくる今月見りよ
つるなかく生すなへち味みらいなずくろ
沐桂あくびうしほし肝けりもし
まろ涙がふくさんなしば盃茶も
七夕ゆきつるにしも安るなし
あづくふべきもちるまるかうへすべくう
利上ととしもも星年うろみん
めつかのい下あいつ上手くはしみめど

まけらしやそそてよこしれ糸筋
かどおろに渡世じげとおしらく
ゆゑがでるまうくかよ訂しみおみ巳」
み宝字が上も下毛のくぬぐゆくと
送る
ころもおうし黒髪山よのぼうしもの
へいがかしらみそなつけ乃らに
かゝらけのいろものめまみいろ似し夜
おもらてあればおもしろい旅

財源福湊序

かねをためむかのは拙者なるこへじしく十銭
しておかさえこつけるとぬかぬぶしおものゝ古押まで
揶らる民俗唐山法よりはく憐むるおしきわが
宇宙第一の重も卯子み中の万法そそらで
憐字民のいきしみな語傳乃一助となる巳」
われがかみ身有がゑなて富士の山と法めき
しごろく己が米み?山とも法つくるべき
智らを人のいへそ世のそうしるともいと

まるでかくみせまよのいふへるをも雅である
俗でも来でも今でも耳掻之文微塵ら
かりく財の源福の湊と数やしは学而第一
のあつふずとし先例のあれるをもあらじ

題鍾馗留守鬼洗濯図画

罷剣揺毫鍾馗出ルヲ請フ看ヨ鬼洗濯
不洗虎皮褌フドシヲ

赤ねがしみ作りし上林といへる茶屋の
額さらくの花を見ずてらるとこふ

馬くらまる場乃茶みせの名をあらはす
まふそてこんりし世ちゃい上ゞらし

東加性序　翁名蕪斜文号亘三

蕪斜が茶業に数やし日い葉年あのづくまんて
ふうしが一至三暮四のいみそし引込業をみ頭
みをあくるい浴園者をとぞうる梯のをみ
まかむくとこし不大種姓のをらくるを悉くせ
鬼の念佛の大津絵万人講の備をむ心
りゞぞすりまづふあわさびこ併の茶屋店

好者は煙管をくゆらすべし
達磨ゝ云ばは書の下紙に金子升
とうゝ集の寒かぜ身に秋のたま
一葉にて知るとき
山〳〵青〳〵すみたり
門前孟の十二月庵にかりて
菅原傳授手習鑑
本院時平車上乗梅櫻忠義向松凝滝
言葉入伐沈浪齋世親王菅相亜

ゝゝ文高学之三幅対の画に表具
ゝゝ
九つゝゝゝゝゝ赤貝ゝゝ作蛸のゝゝ
と吹出ゝゝゝ表ゝゝ大ゝゝ舞のゝゝ
うゝて一文字
花ゝゝばゝげゝゝゝゝゝゝゝ使い来ゝゝ
ゝゝひのゝゝゝゝゝゝ
中蛤貝ゝゝゝゝ紙の板と土ゝ
ゝゝゝゝゝ吹出ゝゝ絵

書具を[illegible]
のほ[illegible]
一[illegible]

遊君五町廓苦海十年流二十七明夢鳴
呼屋氣樓

右苞[illegible]蛇貝[illegible]
いぶ[illegible]表具を沙系びみ
表[illegible]の[illegible]て
[illegible]貝[illegible]梅月

雪[illegible]
伯牙琴[illegible]
古今唯習二鍾期
[illegible]
[illegible]
似絵描[illegible]
京町の[illegible]大[illegible]
[illegible]
描[illegible]百[illegible]

百の年千年を経てうつる絵
ばかりづ代とこそ多けれ　天

庚午の年の雪に盛人の端をあらし
辛未の秋の月に西の清光あり

雪に月の大きなる
山もしらぬ年の花

結び納めの絵に
清らなる代の絵
ふるのありけの

高砂の浦なる松の海辺なる
画

ちとせをかさねる年を経ぬく
ちとせかへてふるの松

鄙ぶる

ほのぼのと明るうらの新しき
ちとせを待ぶる松の明月
山のまもりの月
庭の面の月

吉原八朔

八朔遺風北國方往来如雪競衣裳燈籠鬢黒白無垢玳瑁櫛黄金代粧禿曳下駄連鼻緒客居中町侍腰張己従先月頼今日書送数通文玉章

滝の画

さけのらう李白里ゆれうし三千丈乃ぎ滝のみみ

山手初夏

日よ者系耳子誘姥ほとゝぎす
かゝるといつまぐ
山ぐらの雨に不ゝ乃業性ようる
ものもふぐ
業性乃山ほとゝぎすあやうきまぐ
ゆかつしるこ千うぐとふく
ぐさゝぎ方ゆるゆゝと
ゝ日ぐゝの里姥性ゆゝ

ぶてうとんく
こゝの島こゝかゝりけり
りんりんぶ月
きゝしこのゆ柏
ゝゝかゝ

碑の面に詩をゝ背ゝ
ぶれ分きゝぶゝ

題酒屋壁

此邊居酒屋虜ゝ借錢多寄ル諾ヲ

番頭殿許ニ五ニ一本ノ波ヲ

題田樂豆腐ニ

三五ノ義人差擬通ル膚ハ欺キ白雪ヲ扇生ス風ヲ岡邊ニ煖テ酒ヲ燒キ楓葉ヲ席上ニ敷テ
纏ヲ愛ニ竹サヽ筒エヲ眞崎ノ箱ハニ連テ孤色ニ黑ノ池ノ
岡ノ炭ハ映ニ鳥居ニ紅ヘ相模入道淮南
子共ニ是レ千秋好物同ジ
大きゝるゝを甲ゝ
画ゝ

沼菴乃初りに似くふ石垂の
甲斐のゝ中とさくらゐる
霧雲菴にて
木の細枝毛月
ゆるよ対さくしてさて
山井乃森より下蔭ぐらく雪
秋くるさくなる蔭ぐの初
むうゝ小林の素てかぐら
初くつゝみて湯毛の寺
乃ぬくて対さくらし

寺橋四季のうくる乃中る

春

むくげ茶枝灯乃ふくるぐ毛
くれ形の中甲くゝ花の全集

夏

こゝろの初を山くゝ山毛藝絨の
毛初くつゝ毛茶くめるくゝ初

秋

洗濯初くゝの山くゝ千雅る と

[illegible]

冬

[illegible]

[illegible]

[illegible]四年 駕猪牙

如月 一扁舟

吉[illegible]

[illegible]

和唐寺にて

[illegible]

緒の画あり

[illegible]

[illegible]

春

秋の秋月 [illegible]

[illegible]

[illegible]

疱瘡をかろくするがみうけ合ひ
三国一乃やしまとあげまき
枝折をうけるらく
嵯峨山も千年のちかりをて林乃る子
まけあしく染しまちあ
聞沢村宗十郎改名
観世水流溢沢村宗徒贔屓若雲紀
十千万両金箱贔郎党会紋い字繋
浮かの紋乃いの字を流しもの

うのはとうゐしりうとともに光
烟草のけむりをかきうちも
わがおもうけとうつゝに
白露をてもうらまきにしてきゝとの
ちぎしやまとくさむらと つゆ
江ふぶしの文句によりても
進生姜市
秋風吹送薬生姜画出藤花
千木箱目出度市名無勿体雨

晴天照太神宮

十月十九日甲子天氣甲子日なれ
甲子より大雪天氣ゆるびて
あたゝかなれば小雪
朝めしを喰げ月見うたゝく
はるもこゝろの内に雪
菊の花うるはしく盛
酒のさかばうる事のかなく

七百四十四つ過ぎ相の寺高村名を和相の
茶室より一系宮あり竹のこが
りてあらせる
ゆ是行れ山ぶり名のとうすぐり
一系ゆうこゝろあり
一系相のうと
あぶつけくうよ家題の申でかげと
九月の字より花あるの

猿寺禅師七十賀詞

人生七十古来稀なりといへり。されども今日の世にては、八十九十の老人多し。況んや七十は往古の例なり。されば、この年迄生きながらへ、八十年以内に死ぬるは、老子のお袋も逢ふまじ。されば、この七十九年は、疑ひなく、泡の如くに、仏の常在霊鷲山にいつまでもまめ息災にて住すべし。

の事なり。されば、人の寿命は、八十年が千年の齢、百年は千年の齢、千年は万年の齢なり。されば、仏説に那由他の僧祇百億七千万載弥勒仏の世に出でよと、釈迦の説法、五百塵点劫四十六億七千万載弥勒仏の世に出でよ

三國いろの上よ雲あつて雷の
あづさゆみ　ある画よ
神ゆゑば神ゆゑ引ゆゑと
ゆゑゆゑ田ともゆゑ
玉の画に
下和氏ぞ　ほりゆゑは連珠の
一貫代金　十五枚ゆゑ
十二枚雨ゆゑ出りゆゑ
十二枚雨ゆゑ里ゆゑの

きゆのかつきてゆゑ
大は画よゆゑもちゆゑ
奴ゆゑゆゑ
あつさらゆゑ茶ゆゑ
鞠茶ゆゑ　ゆゑもゆゑ
馬の耳よ風のゆゑ
お織のゆゑ
ゆゑゆゑ　ゆゑ
ゆゑゆゑいで　馬の耳よ風

柳のかげに西行の画に

立よりてみればかくしてしぐれけり
やなぎのかげにやどる西行

七賢人の画に

竹林に藪坂は あきまつとも
ちくりんくらしあそぶ生酔

九月尽

とみらくに菊やきそみ本舞臺
まづ今日をかぎりの秋

時雨

ぶつすゝ道へつくぐあかづ山寺ぞ
さぐみらみ寄にふるは小ぬかの雨

かけうつりの絵に

水をみかけうつりぞやきあきらん
しきせのるすと人にとりれぞ

岳やの夷講に出店二軒の

岳亀山林了

本店に出店みせにの高じら讃

三万年よりかゝる千年をゝ
ゝ少年のこゝゝゝ
ゝゝゝ杭州の人々日ごゝに三十文
の播植とゝゝゝゝ米国の紙
よりゝゝゝゝゝ大江戸の百万戸二百六十
余の公侯八万騎の士大夫二千余所の
市町寺社倡優ゝ彩ゝゝゝゝ一日よ
りゝゝ丈のゝゝ少年をゝゝゝゝゝゝ
例の行ゝ自植ゝゝゝ至膏を神ゝ

うゝゝゝ祖薗ちの級ゝゝゝる上方者
ゝゝゝ駄味噌をゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ少年ゝゝゝゝ同じ山椒ゝゝ
行野ゝゝ鉢ゝ絵茶摺鉢
市の川市郡市川ゝゝ級ゝの
一の字ゝゝゝゝゝ三升ゝゝゝ
賀ゝゝ
升ゝ引一字ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ和合太平記ゝ邦

土用丑日の市の日、あるく
雨降まの普茶今ゆくして
雨日のとうふまきみまちづし羅漢寺り
うりよりこうまいく場普茶く松
谷屋坂うり市川三升のうく
大火跡とおく焼うりうるよ大中
とうふ屋とおくうくうくう
うくうくあるうのうち梅さうく
おりよりうりうる跡のよ

市川三升羅漢寺今まもうて暫の
うぐうきあり
うぐうくうより年い米田千不動さる
七代目豆三つづち金王
酒美財
一体い昆とう俗とうじあふ人 俗者と男
仙場と名づけく老年の楽うり
出づる日月行絵のでんぢに風雷鼓板
のうちぐうとう天地一大戦場乃中よ

乾隆の末元の頃ゑどの
の巨燵より仙台へ
うる行ゝ酒烟草言因りゝ
ゝゝ小伝馬ゆきてゝ
所迄のすりゝと引る因縁の
ゝゝゝゝ劇場芝居の楽い老
ゝゝゝ雅俗ゝゝ
雅俗の西鶴ゝ世
のゝて狼の行てゝ
仮場ゝ

むいゝゝゝ月の
如き一代男ゝ
儀状ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ上戸ゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝ

此酒屋のうちに財とりてものをとの樂をはげしくしてつのみする其あるじ花のこゝろ田舍なりと芭蕉の義をかたるに不惑とにがにいる庚人の時をいかりもの道あり金らすのいふ勢でらひ仕るい大業でせよこうかを用るもの鋳なるみい財つのよ不足なりと大学ものこゝろ民生い勤るあるかせぐよ追ひつく貧乏なりと先

行るのせしこゝろあるべし行ぐつゝい金の番人守錠如もるで酒屋のゝゝゝ

さてみすぐるかのみぬしよ

芝崎九山町遊女千代菊が菊の盃

神ながらなほ栄えつゝうゑる代ぞくの

まがきよりすゑの露もたもまま

千代ぞくの千代も千歳も月の

色いのきつゝ百折いくぐり

いみじくの絵書の中の葉子も

とゝまれる千代の月らみも一本

一元大武の肉とゝまる秋一夜

の梦ものとゝまるとゝ

牛とゝまるとゝ

一ゝとつ斗　二升　八人五

浦川路考と

申ゝ路と考ゝ

演の志所の名猪つゝ

ゝいゝ

路考の月の末の嘉ゝ

沙村訓ゝ

[illegible]
日の出[illegible]人[illegible]行[illegible]の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の浦[illegible]紀の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

壬申歳著

[illegible]

淺草市

析屋揚枝正月屋風[illegible]

雷神門

[illegible]の市[illegible]
[illegible]神棚[illegible]
盧生耶郭の夢[illegible]

栗の飯うしくめく五十年
栄ゆ月中をとをとをとと

菊の画

七百月遠章あとをとをとも
こゝ野こゝ千邦望すのうは

七種

按ノ相ノ按ノ竹ノ御門前叩ノ菜叩ノ薺ノ俎板
道庚土多兼日本多東天未ノ渡素
天一こ

癸酉試筆

初春はなぐるこゝを先らくの
ゝゝかい来ゝ千りゝ

雪

まぐゝゝゝ立ゝ
ゝゝ一ゝ千のぐ仏日のあ

雪ゝゝゝゝ

香炉峰の雪ゝゝとゝぐ立巨燈
ゝゝゝゝゝゝゝゝぐゝゝゝ

牛天神社納の絵馬よ

海老の画牛

角力の図

雨乞小町の図

小野小町

せんぐで万年の絵よ

赤辰会員吉書始

踏歌　秋男

あるむのうちのさとでこ

うのが傍ってうたって

金ひつぐてこの千年の年の年経り

彩のぐりあるうちの恩

湯漏馬

梅の花さくらげ桜やぶこうじ
やぶこうじ桜も梅もあるやね笠
さくらぶし白髭の社の別當
西行法師さくらぶしかなかく
なり出し坊主さくらく
世界のいろはの世ありやそば
めんさくらぶしめやありやいさ
らのいしさくらぶ坊主さくら髭の

西行法師さくらぶしかなかく
さくらぶしの上世界みな花さくらく
なりもあるさくらぶしの里

下女詞

腰似内庭臼歯如新漬茄粧
成鮫飯後流し晒茗檀那
西が京の牡丹(ボタン)さくらぶしの
ほうぶくいつぶくさくらぶ

ほくぐんの四のあいてまつまえ
四五月二十日より日報へ一ぱい
和田の比かうを見くらぶりめと
かりまくんハ千八百年まつしぐと
こ千本と一ぱい
諸色金物のかうたち
ふつりで牛み角みなまつまえ
ゆうぐんみなまつの比べうりる
ぱつみなまつのうをとして

ちぐふりで三ぱんびみなまつ
なまへまつしぐまつの比べうりる
こいこうしやくとまつまつ
ひつまつの比百川樓のあつまつ
莫大海まつまつをおくまつて
千金丸はまつ百川のれ
まつまつまつ莫大丸
蒲鉾鱶まつ大のやすく
ふれ和人とぐまつて

[illegible]

盃をとりて諸白のにごりを

[illegible]

[illegible]大の[illegible]ありび解けて

[illegible]鹿早稲より[illegible]酒

小冊の澁の絵

山[illegible]山づく少冊の澁

[illegible]の伐木丁[illegible]

野分雲の庭[illegible]秋[illegible]

[illegible]の[illegible]の蕭い秋[illegible]

[illegible]

送八百万神之雲形

遥向出雲大社方毎年来月

定隠陽三千餘座同行去八

百万神御託長竈冷破鍋迎

翠蓋禄高珍宝満香箱寄言

堂上、祢宜殿、乗輿、莫、寒、巫女、堂

南川新猫画

東西でぁるとぃふこと

ぃふまでもなく

丹毒焼傳画

絵ぁ千人ぁ

むしろい丹毒端的ぁ茶

柊葉墨法とぃふもの

ぉまぃしぃ

あまぁまぁさ柊葉墨ぃふもの

命ぁぐぐ乃はぁ千ぃふまで

浦川仙女一図

ぉ乃ぁ年ひとめぐりめぐる

ぃふ千せん女の新ぁぃふぶぶ

三乃の画よ

器浮桂犬ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

百姓ぁ法乃秋の中ぐぐ

茶沢ぁ西ぃ市よぁ略乃

看経千〻の秋の夕ぐれ
此ごろの浦の苫屋も不稀〻て
ちいさかもちの秋の夕ぐれ

忍待恵

そまのしたにのべのつぐ〻
まちぼけしかるつれ

琴琴み画よ
つぐ〻羽をむこうに出てそまの
まゝ母中より来金と水性

初冬遊曹司谷

十月、曹司谷花冥会式、延一天帰
妙法百度至神前首掛長珠数
手投御賽銭三盃炯酒勢不羨
祖師綿

嘉月初子

嘉月のそまのもみぢ
そてけそ出る夕ぐれの神
黄屋の杉よ月出るあそ画よ

あげ汐よ月のかつらの枠さして
こゝろい首尾よ初てこゝろ
山梅のうゝあるこゝろ世の絵よ
多れべきちぐさいこゝろ氷と光
こゝろとこゝろ香よ匂へ
放下僧よ
放下僧初花こゝろ枝こゝろて
こゝろとこゝろ神通のこゝ
長井戸の長

本法のあゝの氏のこゝみこゝ
ちぐさ茶京月こゝ屋あよこゝ
天井井桜よ天国の太刀ありと
こゝこゝに雨よあり
天国の山左刀のこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝ山
こゝこゝ月のあゝ京こゝこゝ
きこゝけこゝこゝかこゝ京こ
このごこゝこゝ

飲中八仙

知章

井戸ぐらの李白酒をうて馬乃上
風ふきわらふ猪の牛より舟

沙汰

酒の事より自らうたはのかうど町
十ふたつ中ぐぶれうたうた

左相

雪人ふりふり酒もうたうまく

日午い十事ふり乃入用

宗

盃乃ふりもうたうの男一
ふれうまうまうで飲うたう

蘇晋

うけをの比丘坊主めでうと
弟袋ふふく京子うけ為

李白

新酒といふも一斗詩百へ

百勇しよぐぐ志ゝ川秋毎

張旭

柳髪そぐよ花に春ゝ

ゆゝ旭日かゝとは野の子字

焦遂

五斗ゝゝかぐぐ日ほどりも酒ごゑの

そぐぐ逃ゝ

桃太郎の画よ

三千ゝゝ桃の実千支

思ぶゝ生ゝかゝ花きく

ゆふぐゝ猿犬雉のゝかゝゝ

ゝぐりゝゝさゝゝのけんとゝゝく

犬ゝゝふゝゝあゝゝゝ

大門通懐古

思案橋東一郭中大門景色已

為空更無遊女五丁町唯有米

春千石通

朝顔

早起よりもゆるもみすれば朝夕の
ふるさとをたずねてこそあれ

題福寿草に

元日草先ず咲き一年謀不空此花
称福寿官禄在其中

千秋井の記

千秋井はほうらい井とよびかなの出るこゝろ平沢氏の氣さくなるもてなしあるものなり

ほうらいとは何もこゝにあるべきものゝ
めずらしきものなり日園のうしろにあるがゝ
ごとくの砂の形をこゝにうつし用の国より
此家の当主の家名をとゝめ季姫
るゝこゝいとゝ人あり井をこゝろ羊をこゝ
らもこゝに此家を花さうあるをあやして千年
むかしのこゝろをこゝにとゝめるこゝいとあるこゝろ
こゝにこゝのこゝろをこゝにとゝめるこゝ
ろをこゝにとゝめるこゝいとあるこゝろ
怪を異書こゝに山の

怪とりんぐりこの
いけ釜へかりしかたち紅皿鍋皿み
ゐ耳のうすあるべ箱井づの井づとうけ
あぐらうしこいこと付こと箱づこ
ちくしはまくさ面の耳みとこと
のこうとあるこ
四物屋と書と書のはしらあ
らの出うこと書とよしんよりづよ宝出と
こ出びほこと井とうとうみどろ

うこあるこづる五冊あの代毎出びくどこ
ゐとこづのの代乃出こと書こと
づらみこそよあこづ四ちあこむこ
あこづこれ四直平日天こるうげて濃
このこばの名のこあこびつある日月み
蜂とかこるかこづる沐の宿れとこうこ
不こうんこみこで堀あこみ井のここどこ
あこていこれこと車井みどこき
幸来こづこしこ

後序

いにしへ和の比係奮翰の情懐
を集まとめ天明の一四年あたの
万載狂万載オ集四年のあの又
通称選擅形山人藝舎集まとめ
寸年の序をして其時より深しあ
る事下里にまとめ巴人真あり

法花あり又置山人あり又置山の
正とまとめ遠山をまとめ多摩の
花の子紅葉紫花ごとこのこるに
とあつあみ山の字ひとちりて
寸花と假名をまとめ
りまとめ□○花の枝ものごとあ
文化丁丑の春今山人饭長山

蜀山先生著述目録

南畝莠言　先生数年の作を抄出して近刻

杏園詩集　近刻

杏園文集　全

千紅萬紫　抄録なれども文章ごとに後篇嗣出

江都書林衆星閣藏板目録　麹町平川貳丁目　書物問屋　角丸屋甚助

金匱要略輯義　法眼多紀先生著　全十冊

法眼の説を委く論じ先生の考を加へ金匱の注釈ハ代書ふおせり医家必ず見べき書なり

掌中詩学筌蹄　小林順信卿著　折本　一冊

代書ハ初学の人為に作ふ安ふ為ふ四季人変ホの物景を分其ホ用ひべき熟一字ゆえ疑難を多く集め見ホ平仄を記し一たびハ代一書ゆえ初学の人ハ必ず座に備へべし

孔氏系譜全圖　露木直信撰　一枚

孔氏の始祖黄帝より聖人一世の徒弟嬉家孫代衍聖公襲封綿々として今ふたゝび支流の孫賢達の人々の伝代記せり孔氏一家の系図ふ伝ふ

十七帖　弘文館原本　王羲之の法書十七帖代表一とす

晉王羲之書

作文率　北山先生著　全四冊
文用例證

狂詩碎錦　六樹園先生著　小本　全二冊
粗俗の用ゐべき語あらびゐ鍛礎をあげてくぐく平仄を附せ和仏の人仏書をよむ
ものたちぞろふ粗俗狂くらんと自左あり

杏園詩集　蜀山先生著　近刻
聖道辨物　冢田先生著　全二冊

同　文集　右同
入官筭一義　右同　全一冊

新撰碁經大全　秋山仙朴著　全三冊
滑川談　右同　全一冊

武家法度　全一冊
増補法度　大本四冊　小本四冊

庭訓往来捷注　駒籠先生著　全一冊
本文を大字ゆく書たるべし幼童学の除本とあり書例をばうんりの乃
ひふ布かがり仮ゆりてあげ素読のたるべし泊解のごとく左右の
泊の撰あるを行一字ごとざる場補せり左例往来のごとく仏一出ふ法くせり

古状揃捷注　近刻　左例泊解のごとく童蒙独学志ちくちの出あり

實語教捷注　近刻　右同妥児ゆも為安きるくちくちの本なり

同　證注　右同泊解をたづく記くく独学童蒙の便利ゆそあり

寺沢風月往来　全一冊
女今川綾錦　全一冊

関流筭法點竄指南　梅田大原両先生閲　全三冊
増補塵劫記　全一冊

俳諧田ど抜日　桃隣先生著　小本一冊

既ふ四季の季寄をあげ季ごふ古今の句を集季寄の為に注解を加へ古秋の役とも

俳諧一季寄四季名句撰　鐘開齋差人著　寸珍懐中　全一冊

四季歌号毋のく秋歌ぐ〜関東の名西行社ふ乳ふ歌あんめ皆是まで

ふさとぐもをふ〜く歌〜ふひふさふときふ〜ひてゆをそふふとぐく

ふ〜〜且其門十哲の数句四季歌分ゆ〜く巻末ふ附を俳家作名ふ

ふいち〜〜〜く大ふふきあり又弦紀の友ふとべ〜

遠州頌流生花記　一陽齋芳祇先生著　中本二冊

遠州の花形ふ奥完成あり此書ふ流ド活さ花急のめ〜〜ふ生〜初学紀行の為ふと

御家年中書状箱　文海堂書　四季文書ふ形式文手ふ日月の〜〜をあむ

書札獨誓古　岩田夫山先生書

公文書ハ公の文ふちぐひ本文ハ大字ゆく書ぐふゆとと文を

ゆど字ゆ紙〜ふゆ〜さど書ゆをは作く実ふ幼者才一の書り

色紙形詩歌　同筆　墨帖一本

南畝蔡乃言

公書ハ蜀山先生数十年の作者の中より抜出〜く撰き紙ぐを要をとるゆえ

ゆく〜千年の書紙紙本授と〜古今のる文を参考をたぐふ一夕の清話ふ

そふゆるのふふあるど実ふ千古の考授とゆをべきものなり

千紅萬紫　初編　二編

蜀山先生狂文狂詩狂画ふ〜〜をあむ

北齋漫画初編

奥ふかくうがちて殆ふまうせくさまぐの姿を写さと
編をはじめぐ全部ふそてんとさまざまたり

同 二編

和画ふかめ見てる人拙筆ふ山川鳥獣魚鼈虫ふ
ひくるまぐくとぐくあり

同 三編

二編ふ拙まる紙拾ひ表屋茅葺拙とーくのせごろふる

同 四編

茅屋を加へ席上除本ふ表ーもるとる紙要とを
花表堂塔廻檻月卿雲客鑑育房舎紙ふーく

同 五編

ーくあ紙あごろふ編とふかとたなー

同 六編

剣法槍法弓ふる炮術ホけんとの形を写くはまびぶる
なるとかーとも武術のるきを表せる一書とふべー

同 七編

国ニ名猪の地風両書きのけんちくをうはす

同 八編

茅編ふ洗たる紙補ひ且彩絵書蚕の業紙ちぐ

同 九編

和漢の武者ひび貞婦烈女のたぐひを載を

同 十編

神仏ふるひび貴俗言俗幻術ふうつるう乃
人拙ホを表るす

略画早指南初編　戴斗先生画
仏画ハ口〇乃二ッをりく法の形を画く第拙級尓と雖ゝ
るたゝ〜されハ仏画ふようて学ハ画乃ふ入る事より

同二編早稽古　同
仏画ハ山水ハ天狗のゝと一山紙始め文字を以形紙乃ゆえふ
いろは紙穿ハ幼者も仏法まていまゝ画ゝとまゝ

同三編早稽古　同
茶編ふりまてる紙補ひ且そのかゝふふ一二三の合符と
ゝ〜一章紙〜〜まゝび中とゝゝ〜む

同四編早引　前編　同
仏画ハ画本いろはびきたゝ人ハいの紙法拙師石ユろの紙
ろゝゝせんろせん六歌仙蓮生と紙紙分ちを常る人拙と名人と事ゝ

同五編早引　後編　同
茶編ふ紙〜〜くゝをゝゝく紙をゝゝち実ふ紙に
ゝゝとゝ後の人拙紙りゝむゝと仏画ふ法くせり

三體画譜　同
真行草の年表紙ゝゝち人拙山月第木魯歌虫魚
ふゝゝゝくあゝ後く巻平にはくせり

商人鑑近刻　同
市中商家ハ用のいゝゝ紙巻して太平の愚沢を
あゝふゝと数ゝんと手ねく一拙を法平ゝ〜

戴斗画譜近刻　同
先生七才より五十有四年画乃独学の筋骨と巻
ゝく画作の一勅ゝゝとゝくゝを紙をあ〜たり

呉嬙百人女玉章　北齋画　女用文　今川人
大成百人智恵鑑　同画　女今川人

第代百人操文庫　同画
光琳画譜　大本二冊

雅言集覽　六樹園著

初編三冊出来　二編嗣出

仏書ハいろは歌の次第に部門歌分古書のちらし出古物語の引歌も引歌歌ともを集て
ありたいまそれを今の俗語をもつて釈したるなり「ちらく」とは引ハ源氏帚木巻十四丁ウラニ
るのかゝ起さゞるの物士ゆゑりなくそぞろきものかなり「巻ノ二」巻ノ三巻ノ四雑
ゆへ」とうちとふ歌ちらくとかくゝあたるべたちなるべきちらく「仏書式部日記ハ式部」
仏集ハ云「和名抄ハ云「釋撰字鏡ハ云云と委くそえて「帚木巻ハうまのるゞ
抄培まるハ云ゆゑ」「落ハ不典業ゆゑ」「日記ハ口部
らくとあれバ口部ハ動ハ抄ハ「桑抄集ハ痛抄の痛むさまなり
「手名抄ハ動痛とあるどく痛抄のぢもくとぢきく痛をハ仮名ハ
いろハ閑ハく動発とふいろ仮ハ閑の説ハ
あるゆゑとかくざるハくその仮ともを釈せる説ハ
ちくめのまへのなるまよ出の仮説ハ引のでくるわゞ実ハ和かきるハ
人のたるハちくちとあるべき説なり

通俗排悶録　六樹園譯

ちがの絵入　十冊

孝行　忠義　貞列　友愛　琦行　明断　義侠　玩世　仙縁　霊異

仏書ハ清の孫洙ゞ作なり明末より清朝までの名作ゝ人の作ゝあゞ
たり小児蒙成のたゝとゝとあるべき説なり

源注餘滴　同著　全二十巻

源氏抄注の義ゞ注ともあるべ
源氏抄注の義ゞ注とも悉注文を引く詳ハ釈ハ古注ともあるべ
あるべ引ハ式子細ハ矣ゞ引ハ欄のかゞ式補ひ名出ゆを附注を湖月
抄岷江入楚を読ハ仏ハ倩ハ式と正さゞ古注の説式ハきまへ知べきなり

和文やこゝろ乃て抄　同著

前編一冊出来　後編一冊近刻

東都市町のゆぎりハきさまを雅文ハ注ゞ重たるべ和文かきたるハ人くの
てをりともあるべきなるなり

寝覚乃ものがたり　六樹園漫筆　全五冊

同著

狂文　江戸名所記　全二冊

塵外楼清澄校

狂歌　葉津加蛭子　同撰　全二冊

四季の俳諧より恋雑まで撰び出てふをそかたるかホを偽ぶる狂歌の秘利ときて

文化新撰狂歌百人一首　同撰　大本　全一冊

もろ〳〵の狂歌に肖像をえがき凡奈良の浄時よりの戯笑歌中世の俳諧歌近代の名歌人〳〵の狂歌悪かるらんをえらび洩さとと思ふ古今の風体をもらんとおもふ

狂歌道中記　武者畫狂歌合　同撰

五十三次の名所旧古の勇士の肖像小狂歌の下句を文く歌のうまれ歌

狂歌新撰調度集　同撰　佐君子の戯歌をあつむ

自讃狂歌集　同撰　諸名家画　後編近刻

新撰萬代狂歌集　同撰　全四冊

六集明和安永の比より今小歌まで名ある狂歌の作者を文化の家の人々の戯き

小続出狂歌も洩しまく参たるかめるとこ

少しの笑の僅を見てくるしく良しく皆そ人々の家の集の中より抜出されあと木版

て出しる人々ものの狂歌にハあらぬ今の世月並の集ものく出るあるき集冊と同じ

狂歌雪月花　同撰　月雪花三部の秀歌成集　十二月の部成る

飲食狂歌合　六樹園先生歌の猪級を狂文で世しろく綴しろ狂歌合

狂歌賓荻集　便々館湖鯉鮒大人撰　小本　全三冊

四季恋雑の部ともあまくあつめ方のてうんとうべき狂歌かた

中まとあげろ席上ふとろあるく使ふるんたの小冊とるしく

狂歌五百題　金雞著　小本一冊

和漢朝詠集獨誓古　全二冊

御成敗式目獨稽古　全一冊

飛弾匠物語　飯盛作　北齋画　六冊

新編水滸画傳　馬琴作　画人同　十一冊

忠孝潮来府志　馬琴作　画人同　五冊

假名手本後日文章　作　画右同　五冊

画本葛飾文庫　前北齋　戴斗叟筆

画本外傳　前北齋　戴斗叟筆

寒燈夜話小栗外傳　小枝繁作　北齋画　前中後十六冊

春宵奇談東嬢錦　作　画右同　五冊

春宵夜話玉乃落穂　右同　前後十冊

標注その雪　馬琴作　画人同　五冊

雑書年代記大成　一枚摺

文化十四丁丑年　孟春

麹町平川町二丁目　角九屋甚助

東都書肆　同　徳三郎